平成 21 年 10 月

鼻の穴馬にもふたつ息白し

花野人とは忽然と現れる人のこと

花火見物なのにお化粧してゆくの

花火ひらく直後に音を付け足して

はなびらは赤い唇冬薔薇

離れ這ひどれも孤独の秋の蝿

母のやさしさ苺てふ文字にある

はひふへほほへふひははは山笑ふ

春一番追い風参考になつちやつた

春の日の余白に座してをりにけり

春の水押すな押すなと流れゆく

春服の軽さを羽織りをりにけり

春めくと蹄は厩の床を掻く

万巻の書を食ふ紙魚の無教養

半身に未練のあらず青トカゲ

日脚伸ぶ尺貫法で一二寸

飛行機雲に突つかれてゐる秋の空

ひとつぶはいちまいのこと木の葉雨

滑稽俳句協会ホームページに掲載の記事・写真・イラストなど、
すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

馥郁は水仙の香のことならむ

ふくらうは言ひたいことの山ほども

沸騰の音たて大寒の大薬缶

踏み渡るわけにもゆかず落椿

冬ざるる片減りの靴引きずれば

冬の蝿書を読む吾のどこか這ふ

冬紅葉滅びの色を滲ませる

文明は敵にやあらむ文化の日

睥睨(へいげい)を日課となせり寒鴉

包装の過剰が嬉しバレンタインのチョコレート

へそくりの場所を失念鵙の贄

ベテランよ過不足のなく水を打ち

滑稽俳句協会ホームページに掲載の記事・写真・イラストなど、
すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。